

村野次郎創刊

香蘭



2022年(令和4年)2月号

第99卷

第2号

通卷1094号

二〇二二年(令和四年)二月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第九十九卷第二号



香 蘭

2022年(令和4年)2月号
第99巻 第2号 通巻1094号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(78)	大島 昌子	表二
近詠十五首 猫	岩田 明美	2
作 品		4
一		24
二		32
三		38
推薦香蘭集		39
香 蘭 集		16

作品一特選(十二月号) 相川・朝香・石井・市川・大井田・関口

作品二、三特選(十二月号) 長野・中村(か) 西野・宮原

江口・大島(昌)・小原・庄司・竹本

松沢・武藤・丑山・河野・篠永・田中

村野次郎への旅(142)

一頁公論(9) 訛りなつかし 千々和 久 幸

エッセイ・自由研究 仲人口にのせられて 渡 辺 礼比子

焦 点(十二月号) 花を取り入れた歌 武 藤 昭 彦

七 首 抄(十二月号) 近藤(光) 大井田 啓 子

渡辺君子「ひとつ覚えに」評(十二月号近詠十五首) 牧 野 道 子

作 品 評(十二月号) 作 品 一 伊 藤 康 子

作 品 二 柏 原 義 清

作 品 三 平 川 良 枝

香蘭集 市 川 義 和

耳言あれこれ(3) 明宝研究会第一二三回十一月例会 明宝研究会会員作品評 田 中 あ さ ひ

緑 地 帯 伊 藤 康 子 青 木 朝 子

受贈歌集・歌書御礼 小 笹 岐 美 子

他誌拝見(120)

歌会及び会合・会員消息・他

編集後記・新宿日記

表紙絵……………中村 陽子「浮遊」 目次・緑地帯カット……………和田 和雄

78 表三

74

72

70

66

60

58

56

54

52

50

49

48

46

44

23

20

18

16

39

38

32

24

4

2

大島 昌子

何かなさむ衝動日日に起れども

きそふこころのともすれば消ゆ

『樗風集』

この歌は『樗風集』の中の昭和九年、小題「暴風雨のあと」に詠まれた七首の中の二首目の歌です。先生が四十歳の時、暴風雨に見舞われ、店の看板が落ちたりしたようです。

村野先生は何かしなければと強く心をつき動かされることになりました。しかし気持ちはあつても他の方との関係もあり、うまくいかず思い悩む日々となり、競う気持ちがややもすると消えてしまえそう。そのような心の内を詠まれたと思うと、私はなんと心の優しい先生かと感動しました。

先生のお歌は美しい自然詠や、一読して情景が浮かぶ叙景歌、また難しい言葉でなく平易・平明な詠み口で、さり気ない言葉が深く心に問いかけてくるようで感動を与えてくださいます。しかしこの歌は先生の心の内の思いを詠われており、そこに私は強く惹かれました。

(短歌新聞社文庫『樗風集』28頁に掲載。『村野次郎三百首』には掲載されていない)

四 選 者 の 作 品

日 記 平塚 千々和 久幸

文学も同志も恃むに足らざればプラボーおれは一人で帰る
衰えてゆくほど樂觀に傾くは菘の緩みというにあらずや
老兵は消ゆべし軍馬斃るべし夢は枯野のいずこをかける
龍を飼う夢は潰えて酔いたれば若き日の歌口遊むのみ
ひと回りして出直すか目障りな爺の群れがばらけゆくまで
爺百景さもあらばあれ尻のごとき余生なれども抜いかねて
日記には昨日と同じくても書くか木枯らしが窓を打ち過ぎてゆく
目を瞑り眠っているか病床の妻がスマホに写るを見詰む
門倉先生 横浜 渡 辺 礼比子
県道鳥屋川尻線を抜けてゆく門倉先生いままぬ秋を
相模野の果てに連なる低山の色づく秋を君はいまさず
締切の原稿抱えはるばると訪えば賜びにし茄子はた胡瓜
わが問えばしみじみとして追憶の「藤川武男」を語りたまいき
テノールの艶ある声と聞きいたり稿催促の君の電話を
拙文に励ましの文をたまわりて初心者われは張り切りにけり

ほしいままポストの前を散らしつつプラタナス舞う風のロンドを
手を伸べてくれる人には遠慮なく甘えればいい 甘えてみんか
秋 茜 鎌倉 香山 静子

いくばくかコロナ禍治まれる秋の日に羽織袴の男の子が通る
干し物を取らんと上げたる手をかすめ秋茜一匹よぎりゆきたり
自動車のタイヤを替へて積雪の対応すみしと北の便りは
ふるさとに雪の積もると聞きし夜はソリに競ひし月の夜還る
薄みどりの蚊帳の中にまどろめる幼なき頃の夜を忘れず
良き歌のできぬ私がこの夜半を良き歌えらぶと時を費やす
誰よりも短歌が好きと言ふ人の短歌を止めたる心の裡は
歌の数先づは揃ひし秋の夜をゆつくりと飲む熱きコーヒー

交 差 路 我孫子 丸山 三枝子

メタセコイアの上に広がる冬の空 限りなしとも行き止まりとも
貨車なにを運ぶか知らず傍らを奔りゆくとき悲鳴をあげる
交差路の人の流れにまきこまれ顔から失せてゆくなり我は
追いつめられてなるようになるたどきなき夕空たかく驚ひるがえる
骨密度一三二パーセント 怪訝そうなり医師もわたしも
あかときの夢の赤子は若き日の夢の渚に忘れた息子
網棚に忘れしかばん失せしまま夢にかばんを探しておりぬ
子を忘れかばんを忘れそのうちにわたしはわたしを忘るだろう

作品一特選



(十二月号作品から)

丸山 三枝子 選

秋 桜 川 越 相 川 公 子

亡き妹とゆきし小諸の青空を思ひ出させて秋桜ゆれる
スーパ―の広く大きな駐車場の一角に今日スタバあらはる
メニユーみてまごついてゐる老夫婦われらに優しスタバの男の子
親しみし公園横の並木道けふはわたしに知らぬ顔する
行先は他界であるか人乗せぬバスが行くなり夕暮れのみち
献体を遺言にして旅立ちしと同じ信仰もつ夫君いふ

・四首目下句と、五首目上二句の、ユニークな視点を味わいたい。

ブードル 東京 朝 香 ふさ枝

トリマーに身を委ねいるブードルのあきらめ顔を窓越しに見る
秋あかね流るるごとくゆく空に薊のわた毛まざれこみたり
彼岸花燃ゆる径きて寂しさの行き止まりなる墓山に立つ
野仏のめぐり清める二人連れを今年も見かく彼岸花咲く
うす青き馬追いが来てわが部屋をのぞいているよ今宵十五夜

久々に月を仰ぎて佇めり俯くことの多くなりきて

・あきらめ顔、寂しさの行き止まり、俯くこと、などの把握に詩心が光る。

つばめさりづき 習志野 石 井 雅 子

涼風の吹き抜ける駅に残りたる空の巢二つ 燕去月

盆踊りことしも中止の広場には遠花火の音聞こえくるなり

前を向き生きて行かうと思へども前がどつちか分からなくなる

ちはやぶる天神さまの森の上に二重の虹を眺むる朝

高タンパク低糖質とコオロギを見る目が違ふ健康オタク

才能とはかういふものか講談の神田伯山初めて聴きて

待ちわびて茶房の窓から見下ろせば白く煙れる秋霖の街

・三首目の機知や五首目の皮肉も、二首目と六首目の自然体もいいなあ。

東京五輪 東京 市 川 義 和

前回の東京五輪時われ十八歳年月を経ていま後期高齢

ジンクスが今もしつかり生きてゐた首相が代はる五輪の年に

江戸川区に新たに設置の施設なるカヌーセンター祭り終はりぬ

組み上げし観客席に客なきまま撤去さるるをわが目で見たり

五輪のあとカヌーセンターの運営はいかになるらん他人事ならず

・東京五輪に自身の過去、現在を重ねながら、未来にまで視線が及ぶ。

机 川 崎 大 井 田 啓 子

机上より見下ろす苑に犬連れの人など見えて朝のひと時

うつすらと跡を残してわが机階下の部屋へ運ばれゆきぬ

ときめきて求めし机も時を経て捨つることなど考へてをり

ひとときを机の前に思索する 心に激が沈みきるまで

窓際におかれし古きリンゴ箱戦後の机は永久とほになつかし

春が来てまた春がきて幾年ぞ戦忘れず桜咲きをり

机の前の回転椅子を九十度まはせば脳はキツチン脳へ

・「机」の運作に過去と現在の境遇を托して、一篇のドラマになっている。

夏 草

鎌倉 関口 静子

子育ての続きのやうに反省す唐揚げ食べたる猫叱りつけ

一日中寝てゐた猫がふと起きて約束のごと雨の中行く

今夜また外出をする猫の背に早く帰つてくるのよと言ふ

沢山の乳房を診てゐる技師と二人マンモグラフィの密室の中

収穫のされないままの赤ピーマン道の辺の畑はたにてんでんに落つ

公園の夏草の丈高くなり人の通れる巾だけの道

・一首目と二首目の直喩と、四首目のゾクツとする場面の意味深の妙。

ペロペロネ

横浜 長野 道子

ホウキ草わがペランダに紅葉し誰に似たるかせつかちなるは

花の季を今年も気づかず崖上のそわつと吹かるる葛を見上げぬ

別の名はペロペロネなる小海老草日陰の鉢にひょうきんなり

大輪のひまわり見ずに夏過ぎて喪にふくすごとき白きに出会いぬ

色ぬけてうす紫の彼岸花すくつと立ちて寛くごとし

・それぞれの草花の持ち名とその特性に、作者自身が投影されている。

甘いパイ

福岡 中村 かよ子

三本のクレインが描く空の道諸手を振つて秋が渡れる

誰ももう忘れてしまった廃屋にオマージュのごと野いばら繁る

通せんぼしていた誰かの赤い靴色鮮やかな記憶の中に

人生をもしもデイナーに例えれば最晩年はデザートならん

後悔は喉に詰まった甘いパイ苦しみよりも甘さの残る

・比喩に包んで、一、二首目は外側を、三、五首目は自身の内側を詠む。

白い花火

東京 西野 美智代

足下に白い花火が広がりぬ 綿棒百本ばらまいちやつて

東西の窓をつらぬき夕陽さし校舎の二階を浄土に変へる

ひたすらに学びし日々を温めたりコロナストープの半球の朱は

いとこ取りの首席奏者の後ろ手の第二ピオラの超絶技法

豆腐屋の頑固親爺が入院し店番の鸚鵡の行方気になる

・「コロナストープ」から仇敵の「コロナウイルス」を浮上させる連想力。

咳ひとつ

倉敷 宮原 迪恵

なんとなく月の光の降る気配真夜に目覚めて咳ひとつする

昨日きのうのつづきを生きるほかはなく天気予報を聞き寝につく

人生の終りはそれほど遠くない梅雨あけの天はてなく広し

山鳩の声きく夕べさみしめど家族はいつもわが裡にいる

知る顔の三つ四つと会う街の誰にもひとしく秋は来るなり

・自然の事象や景物に境涯を托した銀鼠色のリリシズムの味わい。

作品二、三特選



(十二月号作品から)

千々和 久幸 選

〈作品二〉

カナカナ止まず

柏 江 口 絹 代

悲しいとも淋しいとも言えぬなり夫は寢室で息絶えており
行く末を案じている夫の死に際の財布に残りし九千円がほど
とうとつに逝きし夫なり前の夜の声の残れる「ああ、そうだねえ」
この夏の暑さの中に死にゆきし夫を弔いカナカナ止まず

もういいよと胸の内より聞こえる夫とも言えず我とも思えず
つかの間のひと世であれば夏草の中に生きいる蟬螂も良き
・感情移入を抑制した所に気丈な作者の悲しみが窺える。合掌

それなりの

東 京 大 島 昌 子

三十度越える暑さの日が続き出ている腕はしつかり焼ける

来年の二月に米寿となる吾に世田谷区から祝いが届く

この上は米寿になるまで死ねないぞ身体鍛えにさあ出掛けるか
友どちと隔たりしまま夏去りて庭隅に今日彼岸花咲く

気にかかる歌稿書き上げそれなりの安らぎに居り秋の夜更けに

・前向きな姿勢が良い。米寿越えなんてちよろいものです！

東京五輪

鎌倉 小原 裕 光

減入りたる時にはここを訪ね来る十二神将に叱咤されんと
中古車のフロントガラスに貼られたる売値が人を値踏みしている
全首のバラリンピックの優勝者は見えぬ日の丸に涙を拭う
視聴率五〇%を越えたるはオリンピックかコロナのせいか
南海に並ぶ台風三姉妹東京五輪を狙うごといる

コロナ禍の東京五輪の開催は偉業となるか愚策となるか

・二首目の下句、五首目の二、三句のウイットが光っている。

瑠璃坂

横浜 庄司 健 造

稜線に添いて立ちたるすじ雲の秋の気配を残し流るる
瑠璃坂を登れば並ぶ水子地藏うしろに白き曼珠沙華さく
住み馴れしわが街今日はしみじみと暮れてゆくなり 山鳩のこえ
のほほんとおいてゆくの秋空につくつくぼうし鳴き急ぎする
川沿いの鉄砲百合は首かしげ流れの音を聞いているなり
滑翔に野を渡り来て黒揚羽イヌタデの上に翅をふるわす

・対象から目を離さない粘りが深みと余韻を与えている。

グランドシニア

千葉 竹本 幸 子

「長く居て下さい」の言葉真に受けて誰も辞めないシニアのわれら
制服のすでに似合わぬわれらなり襟元のフリルがくすぐったくて
春くれば「グランドシニア」になるといふ洒落た呼び名に賃金カットす
ずず虫が鳴いているなり晩夏の夜ねこと私とホットレモネード

外出時マスクにスマホに老眼鏡三種の神器か忘れはしない

・一、三首、会社の攻勢に諧謔で報い恨みを晴らした。

試験まで さいたま 松 沢 みどり

試験までひと月を切り一日も無駄にできない十月が来る
焦っても仕方がないと分かっているが時間は過ぎゆくばかり
犬の世話、息子の相手に疲れたりもうどうでもいい宅建なんて
喜んでほしくて頑張ることにする自分のことなどどうでもいいが
世の中の法律すべてでなくなれと思う暗記に疲れた夜は
・思いの丈を余さず吐き出して作品に勢いと熱気がある。これでよい。

眩 い 光 西東京 武藤 昭彦

雨上がりをじっと待ってる雨宿り 人の噂はなかなか消えぬ
ウイルスがエゴに固まる人間に地球は一つと教えてくれた
芸者とは座敷かかれれば何処へでも選者も同じとかつて聞きしが
あのころは眩い光に満ちていた「太陽がいっぱい」「太陽の季節」
・娑婆つ気を押捺する歌。(選者芸者説)は評者の自虐的ギャグ。

〈作品三〉

素直な生き方 さいたま 丑山 眞弓

少しづつ秋のスパイス掛けられて柿の実の色オレンジに化する
のびのびと自由に育つ雑草に尋ねてみたい素直な生き方
偏屈な口を開かぬ浅蛸二個頑固なわれの器にありぬ
あちこちに野鳩鳴く声聞こえくる夏との別れをしているごとく
・季節の歌と内省的な歌、いずれも作者の今後の可能性を占う。

銀の匙 鎌倉 河野 慎二

歯嚙みせし幾夜か小暗きわが視野に入るや鬼火となる曼珠沙華
銀の匙床に落ちたりいま誰の汗と血を吸ふ砂のアフガン
少年がわれに手を振るゆく夏の入道雲を背に従へて
選ぶことつひに叶はぬ未来図を見てをり寝付けぬ夜の天井に

・言葉や体を潜らせる(肉化)こと。肩肘張らぬ三首目に注目。

物 語 川崎 篠永 路子

あなたにはあなたのための物語われにはわれの編むものがたり
朝な夕な光の粒は降り積みて昨日までのこと浄化されゆく
たそがれにあなたのためのも物語したためて待つ今日と明日の
ここではないどこかを指して飛び乗った夜汽車夜明けの臍抜けた光
空よ空よ二人が笑って暮らすことただ一つわれのできた良きこと
・従前にはなかった自在でしなやかな歌い口が快い。進境著し。

ガラガラポン 取手 田中 あさひ

夏の陽はさみしがりででギンギンと音のするほど語りかけくる
はしきやし木通の三つ兎はるなつをただあをあとぶらさがりたる
みんなみへ帰るその日を知らせよと目に守りこし燕なれども
福引をガラガラポンとひと回し、やり直したいせめてあれだけ
・歌柄が平明になって逆に深みに目が届くようになった。

作品二、三欄に活気があれば、「香蘭」全体が勢いづく。そ
んな目で毎月この欄を読みかつ期待している。綻びを気にせ
ず、奔放自在に歌うべし。

猫

岩田 明美

縁側の下に鳴きゐる一匹の仔猫に遣りし手のひらの餌

吾を睨み貪り喰ひし仔猫の眼鋭かりしを今にし思ふ

餌やればあなたの猫とふ市の広報ぐさりと刺さる春近き日よ

病院に連れて行かむと思へども捕まへられず猫なで声を

裏口に白き尻尾の揺れてをり野猫と向かふわが猫のかげ

腹見せて服従示す野の猫に唸り声かけわが猫戻る

猫の世を知らぬわが家の十六歳ブラシをあてて目薬を点す

吾を仰ぐ十六歳の飼ひ猫の前脚どこか〇脚気味で

まあなんと大きくなつたね白黒のデブ猫ごろりと裏の木橋に

しんしんと時の流れる夜の庭を縄張り争ふ野猫行き交ふ

陽を浴びる野猫見つめるわが猫をねこなで声に撫でる幾度

ひと言随想

親ガチャ

野猫には優しき声は掛けまいぞ吾に何かがずるずると涌く

「おまへさんは猫で命を縮める」と言ひたる姑ははを思ひ出しだり

時かけて夫の楽しむ晩酌の連れはわが猫左隣に

晩酌を愉しむ猫と暮らしたる十六年の長し短し

身勝手な思いは、突然に始まった。猫が好きな私であるが、それは一緒に暮らしている猫に対してのこと。辺りに潜む野猫は全く別である。それなのに、十六年間一緒に暮らす飼猫のストレスを思いながらも、縁側の下で鳴く仔猫に餌を与えた。それは多少の規制はあるものの、ぬくぬくと暮らすわが家の猫に比べ、この猫が不憫に思えたからだ。

そんな折、「親ガチャ」という言葉を知っ

た。ゲームセンターの玩具「ガチャ」から発し、親は選べず、生まれた親によりその人生が変わるといふ意の、何とも無情な言葉。

人間と猫を同じように考える訳にはいかないが、コロナ禍の鬱々としたなかで、二匹の猫にこの言葉が妙に引つ掛かった。

町内の空き家に棲むらしいこの猫は、時に来て猫なで声に鳴く。そして丸々と太っている。

大正期の「香蘭」（三）

千々和久幸

前稿に引き続き「香蘭」昭和一年（大正十五年、1926）一月号の前で立ち止まっている。本号には後に選者として「香蘭」で生涯を全うした横山信吾が「睦月集」の middle に十三首を出詠しているが、六首を引く。

⑤ 遠く来しおもひなつかし茶屋の娘のかりそめにいふ言のやさしさ
⑥ しぐれ降る原の夜風のうそさむしはたはたと馬車の幌の鳴る音

この集の出詠数は六首から十三首までならばらで、現在のように、欄ごとに出詠数が決まっている訳ではなさそう。このあたりは白秋の鑑識に委ねられていることか。

わたしは一時期、横山選下にあった。当時の「香蘭」選者の中では、横山選者が一番のロマンチストだという思い込みがあった。いまこうして初期の作品を読むと、先生が文学青年であったことがよく解る。④⑤の彩りがそんなことを思わせる。いや先生の青春期だった。

③の歌、「高圧線」のたるみに眼を留めたことで、一首が成った。旅にある身の気持の余裕が捉えた光景であろう。
④の歌、青年の女人への視線が彩りを生んで、ドラマの一場面にでもしたい親しさでクローズアップされた。

日光湯元（一）

横山 信吾

① ふる雨にさむく霧へる向ひ嶺のもみちはや、に色づきて見ゆ

わたしは一時期、横山選下にあった。当時の「香蘭」選者の中では、横山選者が一番のロマンチストだという思い込みがあった。いまこうして初期の作品を読むと、先生が文学青年であったことがよく解る。④⑤の彩りがそんなことを思わせる。いや先生の青春期だった。

② 川べりに電車いづれば目路さむし向ふにつづく霧ふかき山

この時代の作品には時代に即した難解な熟語や言い回しがあるのだが、この一連に晦渋なところはどこにもない。みなしなやかに詠まれ、事実の把握に膨らみがある。

③ このあたりひろき川原を越えてある高圧線はひく、たるめり

①の歌、何でもなしの囁目だが、これから旅

④ 坂道のはたてに見ゆる女連れしぐれにさむ

この号の評者は杉浦翠子、矢代東村、橋本敏夫、村野次郎である。

続いて「前月歌壇合評」を覗いてみよう。歌壇（他結社誌）の佳作を転載することは現在でもお馴染みだが、それを合評するというのは珍しい。

⑤の歌、旅先で出会った「茶屋の娘」が、もの思わせる。「言のやさしさ」には、旅情も籠められていたのだろう。
⑥の歌、「馬車の幌」がエキゾチックな雰囲気醸し出している。上句は少しく詰まっているが、作者には大切な小道具だった。

・一もとの裸木ぞ光る向山の伐採あとの見の
さみしけれ 前田 夕暮

(翠子) 前田様のお歌には、もつと描寫の微細な洗練されたものがある筈で、このお歌は多分數の埋め合せに掲げなすつたのでせうと思ひます。

(東村) 第二句『ぞ』はじつといふ意味の『ぞ』なんだか。たゞ語を強めるだけの意味か。語法の上から氏獨特の無茶がある。一本調子でぐうつと詠み上げ所大に氣持よし。『見のさみしけれ』といふ言葉からは、氏の純な感情が窺はれて面白い。

(敏夫) 荒けづりな所は前田氏の特長ではあるが、『一もとの裸木ぞ光る』『見のさみしけれ』は主觀を露出し過ぎて甘い。

(次郎) 裸木、伐採と云つたら、一もつとでなく一本とゆきたい。其處に前田氏の無雜作と素朴の魅力がある。

大原海岸にありて風雨繁きころに
海の空おほひて低き灰雲のかくて幾日を北し南す 窪田 空穂

(翠子) 窪田様のお歌には、良くかうした大きな風雲を取扱つたのを拝見します。さうして、感歎させられるのも勿論ありますが、これは、

失禮ながらそれほど思ひません。(中略) だ

いた大きな景色を詠む時あまり正直に描寫することは、反て、柱や窓わくばかり眼に立つ建築物を見るような氣がします。このお歌にしても、海のおほひて、低きとか、北し、南す、と云ふような言葉があまりに正直に描寫し過ぎやしないでせうか。(後略)

(東村) 『海のお』といふ様な使い方は、それでいいのから、第三句から第四句へのつながりが考へものだと思ふ。格調がしつかりしてゐて、立派な様にも見えるが、僕としてはもつと生采のある香氣の高いものが好きだ。

(敏夫) この様に完全に擱んで、格調の勝れた歌の前には頭が下る。

(次郎) 格調の確かなこと、末句の句法など爲めになるけれども、其他の點については、矢代氏の評された心持にちかい。

・あかあかと霜の朝日の門口に獅子のかぐら
の舞ひ入りにける 太田 水穂

(翠子) あかあかと云ふような言葉もうつかり使ふと虐められる今日の短歌界ですから、私なども成るべく使はないようにして居ります。

(中略) この御歌の『霜の朝日』と云ふそれで意味は受取れても、私はかうまで、詞を節約

しなくとも宜しくは無いでせうかと思ひます。けれど、太田様の御事業には尊敬して居ります。

(東村) 『あかあかと』を第一句に据ゑたのをどうかと思ふ。『霜の朝日の門口』もそのままうけ容れられない。無理がある。結句の『ける』これは大に得意なのだらうが、何だか變だ。この歌が割合に面白い境地を擱んでゐる、可成よくなる歌と思はれるので、わざと難くせをつけて見た。

(敏夫) この様な歌は批評の外である。

(次郎) 霜の朝日は正確な表現ではない様に思ふ。獅子のかぐらも斯う云ふから、歌一首はいい氣持なものである。

この他の宇都野研、土屋文明の作品を採り残したが、その批評はご覧の通りいづれも直截率直で手厳しい。他結社の作品と雖も、當時の歌壇ではこの程度の批評は普通に行われていたのだから。

また今号の評者の杉浦翠子の発言は、批評に自作との対比なども加えて、長々と熱弁を振るわれるから、その一部は割愛せざるを得なかつた。